

売薬の意匠あれこれ 瑠璃(ほうろう)看板—その6

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有(ひらい・たもつ)

令和の時代になって早くも7年たち、平成時代の30年間を合わせますと昭和時代からは40年弱の月日が過ぎました。

そのような昭和時代の代表的な広告媒体である瑠璃看板には

現代では見られなくなった(使われなくなった)商品も登場し、そのような観点から、これらの瑠璃看板は薬や薬局関係の文化史をたどる資料ともいえるものです。



①「明治 メリーミルク」

かつて昭和時代の薬局の店頭では「粉ミルク」は大きな一角を占めていました。

シンプルな体裁の戦前の「明治 メリーミルク」の看板ですが、その製造元である(現)「株式会社明治」の創業は、大正5年(1916)の「東京菓子株式会社」の設立にさかのぼります。

大正6年(1917)には明治乳業の前身の「極東練乳株式会社」を設立、同10年(1921)には練乳「明治メリーミルク」を発売しました。(なお練乳とは通称コンデンスミルクと呼ばれる牛乳に砂糖を加えて濃縮した加糖全乳のことです。)



②「森永ドライミルク」

(現)森永乳業株式会社は大正6年に日本練乳株式会社として創業されました。大正8年(1919)には小缶練乳「森永ミルク」を、大正10年には「森永ドライミルク」(育児用粉乳)を発売しました。

この戦後の「森永ドライミルク」の看板には「取扱店」との文字が書かれていますが、当時の薬局では各社のミルク製品が店頭に並べられ、以前紹介した吊り下げ広告とともに大正製薬、佐藤製薬、エスエス製薬、全業工業などの大手チェーンメーカーの会員の表示などが掲げられ、当時の薬局の典型的な店舗の雰囲気を感じさせていました。



③「牛乳石鹸」

「カウブランド (COW BRAND)」で知られる「牛乳石鹸」は、明治27年(1894)当時は現在の「ライオン株式会社」の前身の「小林富次郎商店」の商品でしたが、その後「牛乳石鹸共進社株式会社」が製造販売権を譲り受けました。

昭和3年(1928)に発売された「牛乳石鹸」(赤箱)は、上品なやさしいローズ調の香りでミルク成分(乳脂:肌の保護成分)に加え、現在うるおい成分としてスワランを配合、ゆたかでクリーミーな泡立ち、しっとりすべすべのなめらか美肌へと洗い上げてくれます。

また昭和24年(1949)にはさわやかなジャスミン調の香りのさっぱりとした洗いがりが特長の青箱も発売されました。



④「資生堂パール歯磨き」

現在、日本の大手化粧品メーカーの「資生堂」はそのルーツは明治5年(1872年)に東京銀座に開業した日本初の洋風調剤薬局「資生堂薬局」がその原点です。

その後、現代に至るまでの長い歴史を持つ同社の歴史においては、戦時中の化粧品の使用が制限された時代や高度経済成長期の生活消耗品(石鹸・歯磨きなど)の需要の高まりなど、幾多の社会情勢の動きに翻弄されることも数多くあったと推測されます。

この「資生堂パール歯磨き」もその一つといえるものです。大正時代にかけて同社の商品の中で最も人気が高かった「香油花椿」(髪油)に由来する「花椿マーク」が大正4年(1915)に誕生しましたが、現代でも使われている「花椿マーク」を配したこの「歯磨き」の看板は、真珠のような白い歯をイメージさせる商品名と相まって化粧品トップメーカーにふさわしいカラーとデザインの瑠璃看板に仕上がっています。